

パーキンソン病とフレイル・サルコペニア

吉崎 崇仁

Takahito Yoshizaki

慶應義塾大学医学部神経内科 専任講師

はじめに

最近フレイル・サルコペニアなどの言葉を聞くようになってきた。これらは超高齢化社会を迎えつつあるわが国において、ただの寿命ではなく、“健康”寿命を伸ばしていくことが課題となっているからである。骨折、易感染性、栄養失調、失禁など多彩な病態が組み合わさって日常生活動作（activities of daily living：ADL）の低下につながる状態を「フレイル」と呼んでおり、老化により活動量が低下し、筋肉量が減っていく状態を「サルコペニア」と呼んでいる。パーキンソン病（PD）は運動症状が中心の疾患であるが、ADLの低下も筋肉量の低下も差し迫った危機であり、老化に伴う虚弱状態を避けることは重要である。最近の研究では、PD全体としての予後はおよそ20年、幻視が見えてくると5年という予後が想定されている¹⁾。最後の5年では幻視、転倒、認知症、施設入所などADL低下が連なっており、PDによる虚弱の部分がみえてくる。本稿では、PDにおけるフレイル・サルコペニアについて論じたい。

フレイル・サルコペニアの定義

まずもって重要なことは、フレイルの定義である。フレイルとは、ストレスに対する回復力が低下した状態である²⁾。例えば、中年でも青年でも骨折することがある。

しかし、中年や青年は骨折してもしばらくすると回復して、今まで通りの仕事ができるようになる。一方で、後期高齢者になってくると、この回復力が低下して今まで通りの生活に戻ることが困難となってくる。いわゆる「歳のせい」とされる事柄であるが、この戻りにくさがフレイルである。実際後期高齢者になると肉体的な問題で各種症状が出現しやすくなっており（表1）、身体機能障害に移りやすいうえ、場合によっては死亡のリスクにつながる。言い換えると、フレイルとは今まで「歳のせい」で片付けていた事柄を積極的に拾い上げることで、より健康的な状態を維持することを推進する概念であるといえる。そのために日本老年医学会は2014年、従来「老衰」や「虚弱」と呼ばれた加齢に伴う衰えを「フレイル」という用語に統一する声明を発表した。英語では“frailty”と呼ばれる言葉の形容詞型である“frail”をカタカナ表記することとしている。フレイルの基準は、2001年にFriedが提唱したものが通常使われる（表2）³⁾。この分類でフレイルに分類されたものは死亡率が高くなっている。疾患ではないが、フレイルは取り上げるべき必要性がある。

もちろん、この基準で一旦フレイルと診断されたものでも、日常生活を見直すことでプレフレイルや健常群に移ることができる⁴⁾。つまり、フレイルは可逆性の状態である。虚弱、脆弱、老衰などは不可逆的なイメージが先行してしまうため、この可逆性の状態を表す新語を必要があったのである。

一方で、サルコペニアはフレイルのなかでも筋肉的障害を示す概念である⁵⁾。加齢に伴い骨格筋量が低下する